厚生労働省委託事業「地域の人材による子育て支援活動強化研修」

全国子育てひろば実践交流セミナー in ながの

親子のそばに　ご縁がひろがる　しあわせ信州から

≪開催概要≫

■開催日：平成 28 年 10 月 29 日（土）13:00~17:00
　　10 月 30 日（日）　9:15～12:30

■会　場：アクティホール／JA 長野県ビル
　　（長野県長野市大字南長野北石堂 1177－3）

■主　催：NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会

■後　援：（社福）全国社会福祉協議会・長野県・長野市

■協　力：全国子育てひろば実践交流セミナーｉｎながの実行委員会

■①参加者合計：428 名

1 日目参加者　362 名　（1 日目のみ参加者 84 名）

2 日目参加者　344 名　（2 日目のみ参加者　71 名）

（第 1 分科会　70 名　　第 2 分科会　45 名　　第 3 分科会　47 名

第 4 分科会　55 名　　第 5 分科会　57 名　　第 6 分科会　70 名）

両日参加者　273 名

のべ　706 名

②交流会：約 180 名

≪１日目　全体会≫

■開会挨拶

金山美和子さん（全国子育てひろば実践交流セミナーin ながの実行委員長）

■来賓挨拶

阿部守一　長野県知事　（代読：長野県県民文化部長　青木弘さん）

加藤久雄　長野市長

■行政説明

地域子育て支援拠点事業と利用者支援事業

【講　師】野村知司さん　厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化総合対策室　室長

Ⅰ　地域子育て支援拠点事業の概要

消費税増税による増収分を活用しながら、地域子育て支援事業、利用者支援事業の整備を推進中。地縁・血縁のない中で子育てをしている人や、自分自身も一人っ子など少子化の中で育った人が親になる人が増え、子育ての負担感、社会からの孤立感を感じる人が多い。反面、特に理由なく子育て支援サービスを利用していない人が 29.4%、自分がサービス対象者になることに気づいていなかったり、ニーズに対応できる支援があることを教えてあげる人がいないなどの理由から、ニーズが埋もれている可能性もある。また、一般へのアンケートでは、支援や場の必要性は感じるが、それぞれ皆さんご自身の仕事もあってか「自分がやろう」というところまで踏み込む回答は少ない。そのため、気軽に相談できる関係づくり、ニーズへの気づきや、サービス利用の支援、地域資源の開発などを推進する取り組み、仕組みとしてそういった場を、待っていれば自然にできるというものではなく、政策として地域に「作っていく」必要がある。拠点として、地域の子育てにどんな問題があるのか把握・発信することのほか、今後は拠点以外の支援へのつなぎや地域行政機関や他機関との連携協働など地域の子育て家庭支援を進化・深化していくために、利用者支援事業の実施という展開が期待される。

Ⅱ　利用者支援事業の概要

利用者支援事業は、基本型・特定型・母子保健型の 3 つの事業類型があるが、利用者支援に期待される役割を端的に言えば、基本型で掲げている~~は~~個々の親子に必要な支援につなげる「利用者支援」と地域の関係者・機関のネットワークをいかす「地域連携」の二つの柱で構成される。個別の支援をうまく回していくためには地域との連携、普段からの関係づくりが必要であり、地域子育て支援拠点には、普段から親子のニーズに接しているという強みをいかしながら、利用者支援と一体的な運営で子育て家庭支援の機能を強化することが期待される。

Ⅲ　さいごに

利用する立場に立った「空間づくり」や雰囲気づくり、埋もれたり言葉に出てこないニーズに対して「寄り添い」、普段から地域の中で関係、つながりを持っておくこと（「地域連携」）が大切。制度は子育てしやすい地域・社会を作るための道具であって、事業をすることそのものが目的なのではない。なんのための事業なのかという視点を忘れずに、普及と改善に努めていくことが必要と考えている。

■基調講演

地域子育て支援拠点の質の向上を考える

【講　師】大豆生田啓友さん　玉川大学院教育学研究科　教授

◇「こんなはずじゃなかった！」～ご自身の経験談

子ども３人。長男一人っ子７年の後２人目誕生から積極的に育児に参加。幼児教育に携わり「子どもの心に寄り添う保育」を提唱してきた自分、自信もあったが思い通りにいかない育児にイライラし虐待一歩寸前に。他人の目を気にしながら子育てをする閉塞感を痛感する。「ひろば」と「園」に救われた。

◇NHK　Eテレ「すくすく子育て」くわばたりえさんのエピソード

イヤイヤ期の放送回にて、子育てしながらイライラしてしまう悩みに「子育てしていていつも笑顔で子どもといられるわけないでしょ。」という率直なコメントに号泣するくわばたりえさん。多くの賛同の声が上がる大反響の回となった。子どもをかわいいと思い良い子育てをしようとしてもうまくいかない、「こんな親じゃ子どもがかわいそう」「私だけがダメなのでは？」と思う人が多くいるということを実感した。目の前にいる親がどんな思いでそのことをがんばろうとしているのか？エネルギーを注いで頑張っているということを理解すること、どう寄り添えるかを考え直すきっかけとなった。

◇サザエさん時代とは違う今の子育て

サザエさんとタラちゃんを例にとると、身近な家族（祖父母と同居、カツオやワカメ）と地域の支え（伊佐坂先生など）があるが、母親一人で子どもと向き合い自由に外で遊ばせられない実態。情報時代で早くから子どもの能力開発に取り組まねばと思う焦燥感など様々抱えている。正しい情報を提供するのも、ひろばの役目である。

◇産後、拠点を利用するまでのプロセス

拠点がなかなか居場所にならなかったある母親を調査。その母親は、問題意識を持ち、大学院にて研究。調査結果から、早い段階での潜在的なニーズの気づきや掴んだら離さない気持ちのつながりなどが非常に大事ということに気付かされた。①通い始めた時期②場に慣れるまでの時期③場から学ぶ④子育て４プロセス・・・と段階がある（大学院生の上田よう子の研究）。人は簡単に本音を語れないものである。自分のことを話せたり聞いてもらう機会や講座をわかりやすく設定していくことも必要。また、ひろばに来ている人には４つの層があり、ひろばに来ている人の中にも困っている人がいるかもという視点が非常に大切。困っている親子は目の前にいるのではないか。

◇二人称的アプローチ

人が育っていくときには二人称が存在する。発達心理学者レディの「二人称的アプローチ：乳幼児が生後数か月で、すでに他者の多様な心がわかっており、それらに極めて人間的な応答をしている」やフィンランドのトゥーラタンミネンによると、「乳幼時期にお母さんが機嫌が良いことが最も大切である」と。親がハッピーであることで、ポジティブな養育となり質の高い養育につながる。子育て支援に最も大切なのは親支援である。

◇正しい子育てよりあなたらしい子育てが大事、本来の自然な関わりへ

現代の子育ては、マニュアルがあるため純粋に子どもをかわいいと思う機会を失っている。親が感じる赤ちゃんへの愛おしさなど、自然な対応を大切にするような支援、つまり親が自然に子どもをかわいいと思うことを支援すること、そしてわかってもらえる誰かがいることが重要でありそれが「ひろば」である。

■パネルディスカッション

少子化時代における地域子育て支援拠点の役割

～当事者にとって「子どもを育てやすい地域」を目指して～

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】 中條美奈子さん　認定 NPO 法人マミーズ・ネット　理事長（新潟県上越市）

【パネリスト】渡辺顕一郎さん　日本福祉大学子ども発達学部　教授

金山美和子さん　長野県短期大学幼児教育学科　講師

草間康晴さん　長野県県民文化部こども・家庭課　課長（長野県長野市）

小笠原憲子さん　NPO 法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト　理事（長野県長野市）

◇パネリスト：渡辺　顕一郎さん　日本福祉大学子ども発達学部　教授

現代日本は、高い高齢化率を維持したまま人口が減少していく社会。基本これからは共働きが前提の社会となる。仕事の人間関係と子育てを支え合う人間関係は違う。あらためて支援の質が問われてくる。多機能的に子育て支援事業に取り組む場合、本丸としての子育て支援拠点を意識する。

今後の課題：社会福祉・児童福祉―社会が変化しており２０年前とは状況が違っている。何が変わっているのかを正確に踏まえて対応していく必要がある。今、変節点にある。多様なニーズをとらえて拠点ができることをしっかりしていかないといけない。「場」を持つ強みを生かす。ドロップインとしての基本機能がしっかりしていないと効果は期待できない。「個（孤）」でいた人が「場」につながる。

一言：お母さんが笑顔でいることが大事。子どもはそれを見て育つ。お母さんに笑顔になって欲しい。

◇パネリスト：草間　康晴さん　長野県県民文化部こども・家庭課　課長（長野県長野市）

長野県人口定着･確かな暮らし実現総合戦略～信州創生戦略～が平成２７年度に策定され、子育て先進県の実現を目指し、信州型自然保育認定制度の創設・長野県子育て支援戦略の取り組みがある。長野県は平成２７年国勢調査で女性（１５歳以上）の就業率が全国で２位。安心して子育て・子育ちができる環境を整備するため、子育て支援拠点の整備を進める。

今後の課題：地域活性化を如何に維持するのか。子育て世代にとって長野県が魅力ある場所にする。首都圏からの移住促進。女性の活躍支援として子育てと仕事の両立。困難な課題を抱える親子の支援。子育てを楽しめる様、整備していく。顔の見える子育て施策として、地域子育て支援拠点に期待する部分である。

一言：子育て支援拠点がどのようにニーズに応えるか、官民共同しそれぞれの知恵を絞ってやっていきたい。

◇パネリスト：小笠原　憲子さん　NPO 法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト　理事
（長野県長野市）

ひろばを運営し１３年になるが、現在は相談内容が複雑・多様化し、一人ひとりのニーズに応じた子育てサポートが必要。また、地域とのつながりのない中で孤立感、不安感、負担感を感じながら一人で子育てをしている姿から、地域でのサポートの在り方が課題。
大切にしていること今後も大切にしていきたいこと：支え合いの（ピアサポート）の仲間作り。主体的子育てへとエンパワメントすることで当事者も支援者となれる。生まれる前からの継続した支援、地域で声を掛け合う子育て環境づくり、ひきこもりがちの気になる家庭への「出向く支援」等、一人ひとりのニーズにあった支援を一緒に考え、地域の様々な人、機関と連携して行っていきたい。
一言：相談の場、ファミリー・サポートセンター、ホームスタートなどいろいろな機能がひろばにある強みを生かし、様々なニーズに応えていきたい。利用者支援事業につなげていきたい。

◇パネリスト：金山　美和子さん　長野県短期大学幼児教育学科　講師

拠点支援者を対象に実施した調査から長野県内の支援者の現状が明らかになった。支援者の半数は経験２年未満であり、７割が４０～５０代である。実践の積み重ねをどう共有し継承していくかが課題である。また、小規模自治体が多い長野県では、支援の担い手不足や、極端に利用者が少ないため利用者同士の交流が難しいという問題も散見される。
これからの視点：すべての地域で、親子が「拠点を利用して良かったと」思えるような支援を実施するためには､利用者親子の交流を促進する拠点の環境づくりを再考していくことも大切である。支援の質の維持・向上のためにはきめ細やかな研修が必要であり、拠点のスタッフ同士が現場でスキルアップできるような仕組みの検討も望まれる。
一言：強みの「場」。その場をどう生かすか・環境をどう作っていくかが大事。質の高い支援を実施するための研究を進めていく時期にきていると思う。

◇コーディネーター：中條　美奈子さん　認定 NPO 法人マミーズ・ネット　理事長（新潟県上越市）

地域の中で親子が幸せに暮らしていくために、拠点はその役割を意識し続け、ニーズに応えていく必要がある。子育て支援を一時のブームにしないためにも、目の前の親子に寄り添い、また今は目の前に居ない親子にも思いをはせて支援していきたい。皆で、各自の地域で、頑張りましょう。

■主催者挨拶
奥山千鶴子　（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会　理事長）

2日目

■第１分科会　地域子育て支援拠点の４事業キホンのキ

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】安田典子さん　　NPO 法人くすくす　理事長（岐阜県大垣市）
【講　　師】渡辺顕一郎さん　日本福祉大学子ども発達学部　教授
【話題提供】松村由美子さん　NPO 法人おしゃべりサラダ　代表理事（長野県飯田市）
　　今村裕美さん　　揖斐川子育て支援センター　課長補佐（岐阜県揖斐郡揖斐川町）

◇コーディネーター：安田典子さん　NPO 法人くすくす　理事長（岐阜県大垣市）

地域子育て支援拠点の基本４事業（①交流の場の提供と促進、②相談・援助、③子育て関連情報の収集と提供、④子育て・子育て支援に関する講習）について１日目の全体会で、キホンのキが大事だということがわかった。講義や話題提供をもとに会場の皆さん･登壇者と一緒にディスカッションを実施し、あらためて大切にすべきことを考え深めていきたい。

◇講師：渡辺顕一郎さん　日本福祉大学子ども発達学部　教授

地域子育て支援拠点の基本４事業は地域子育て支援拠点事業実施要綱において連携型、一般型に関係なく必ず実施する基本事業として位置づけられている。

①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進

子育て中の親子にとって居心地の良い環境を提供し、そこを利用する親子を紹介し交流を促して子育ての仲間づくりを助ける。子どもが夢中になって遊びこめて、非認知的能力をも育むような環境づくりの工夫が大事である。

②子育て等に関する相談・援助の実施

個別の相談に対応し、気兼ねなく何でも相談できる場に。利用者同士が互いに悩みを相談し合える場としての働きも大事。

③地域の子育て関連情報の提供

子育ての情報を集め効果的に伝える工夫と利用者が情報を入手しやすい工夫が必要。最近では、就労や再就職、保育に関わる情報を求める利用者も増えている。

④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施

利用者の関心に沿った講習、地域の意識啓発やボランティア養成など地域で子育てを応援してくださる方々を増やしていくための講習の実施。

基本事業をふまえ、日々の活動を組み立て、具体的な支援を展開・実践化することが大切。

◇話題提供：松村由美子さん　NPO 法人おしゃべりサラダ（長野県飯田市）

平成 14 年にママ仲間で親子の居場所「おしゃべりサラダ」を立ち上げ現在 14 年目。今年 3 月に NPO 法人化。

①交流の場の提供と促進

働き方や資格が様々な 15 名のスタッフが子育て仲間として関わることを大事にしている。活動を始めた場所が 10 坪の狭さで交流が生まれやすく、お楽しみ会や講習会、食事など皆で何かを一緒にする体験がママたちの共感を増やし、つなげていった。自分の子どもだけでなく皆で子育てをする場所でありたい。

②子育て等に関する相談、援助

スタッフが多いため日誌・スタッフ会で情報を共有している。話し易い環境や場面を考えるのも大事。スタッフによって助言は違うが子育ての形や方法は様々であり、正解ではなく答えを見つけるヒントにしてほしい。ママの気持ちに寄り添い気持ちを受け止めることがなにより大事。この人に聞いてほしいと思われる信頼関係を築いていきたい。

③地域の子育て関連情報の提供

市の関連情報、新聞の記事、ママの関心事は何かアンテナを張り情報収集をしている。荷物置き場に情報を掲示、必ず目に入るよう工夫し、見やすさわかりやすさを大事にしている。

④子育て・子育て支援に関する講習会の実施

ママ同士の共有の場となるようオープンな質問コーナーを設定したり、ママたちが聞きたいことを講師にその場で答えてもらうなどニーズの把握を大事にしている。

◇話題提供：今村裕美さん　揖斐川子育て支援センター　課長補佐　（岐阜県揖斐郡揖斐川町）

近隣町村との合併と同時に単館型の子育て支援センターとして出発し 11 年が過ぎた。少子高齢化が著しく、センターが子育ての仲間づくりの場になっている。

①子育ての交流の場の提供と促進

親子のリズムに合わせ利用できるようランチルームを設けている。ランチタイムを決めることで時間のけじめや食事のマナーを学ぶ場、子どもの食事に関する情報交換の場にもなっている。

②子育て等に関する相談・援助

電話相談は終日、育児相談は随時受付けている。月一回発育測定を実施し、保健師と栄養士による発育・栄養相談を実施。地域の公民館や幼児園に出かけ相談の場づくりをしている。

③地域の子育て関連情報の提供

毎月子育て支援センター通信を配布、町広報誌や町ホームページ、町広報無線などで広報活動をしている。全戸に町内情報が映像で放送されるシステムで毎月の予定や活動の様子を放送、家で家事をしながら情報が手に入る。

④子育て・子育て支援に関する講習

旬の食材を使った食育講座や年齢の発達にあった読み聞かせの方法や絵本、わらべ歌の紹介、専門家による育児講座やベビーマッサージを通しアタッチメント形成の重要性を伝え、育児の楽しさを参加者と一緒に考える時間を設けている。

◇グループワーク

自己紹介のあと、基本４事業について自身の拠点で実施している活動で工夫している事、大切にしている事・課題・今後取り組みたいことなどを個人でワークシートに記入。その後ワークシートをテーブル内で回し読み、その内容について意見交換。

◇質疑応答とディスカッション

Q　週３回ほど朝 10 時から夕方６時まで滞在する親と子（3 歳と 7.8 ヵ月）に対し、スタッフの捉え方も様々でスタッフとしてもなかなか声をかけづらく見守っている状況だが、どう考えたらよいか。

A　まずは母の気持ちを受け止め、普段の会話の中から家庭環境の悩みや不安など聞けると良い。少しでもリフレッシュできているのであればそれくらい居心地が良い場を提供できていると喜んでいいのではないか。

Q　子どもの数が減り、拠点に来る親子も減っている状況に対し、揖斐川町での取り組みを教えてほしい。

A　出前保育で各幼児園に出向きそこの子どもたちとその校区内の未就園児が交流を促したり、地域の公民館に出向いて交流している。交流が地域の方の力になって地域の活性化にもなっている。揖斐川町はこれから「森のようちえん」に取り組み、自然遊びの大切さを伝えていきたい。

Q　父親の子育てに関するグループ作りの促進に取り組んでいるが、父親を参加させるのに苦労している。どんな企画を考えたらよいか。

A　まずは来たことに対し父親に評価を返してほしい。手遊びや歌は苦手なので何か作業を挟むようなものが参加しやすく父親同士のコミュニケーションが取りやすい。

Q　広い拠点での運動欲求を満たしたい親子、ゆっくりしたい親子、小さい赤ちゃんの安全を叶える居場所の上手なゾーニングのポイントはどこか。

A　必ずしも活動的な運動は中だけでやる必要はない。例えばプログラムの中に屋外でおもいきり遊ぶ時間を取り入れるなど、時間やスペースを上手く使い、親子のニーズに合わせて活動できるような工夫をしてほしい。

■第２分科会　利用者支援事業の基本をおさえる

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】中橋惠美子さん　NPO 法人わははネット　理事長（香川県高松市）

【講　　師】橋本真紀さん　　関西学院大学教育学部　教授

【話題提供】浜下峰子さん　　氷見市地域子育てセンター　主査（富山県氷見市）

◇コーディネーター：中橋惠美子さん　NPO 法人わははネット　理事長（香川県高松市）

高松市内の地域子育て支援拠点３１か所の内、NPO 法人わははネットは現在、２自治体で４子育て支援拠点、２自治体で２利用者支援事業を受託している。高松市は平成２８年４月より子育て世代包括支援センターが開設され、こちらとも、情報交換・合同研修等を実施し、良好な関係性を図りながら子育て家庭の支援にあたっている。今回は、講師の橋本先生の講義を少しでも長く聴き学んでもらいたい。

◇講師：橋本真紀さん　関西学院大学教育学部　教授

「地域子育て支援拠点における　利用者支援事業の展開」

子育て家庭にとって身近な場所で、相談に応じ個別のニーズを把握し、適切な施設や事業等を円滑に利用できるよう支援するには、日常的に地域や様々な関係機関等とネットワークを構築し、不足の社会資源をオーダーメードで作っていくことが必要である。

対象は小学校就学前の子育て家庭を基本としつつ、地域に存在する様々なサービスや支援を知らない人にも積極的にアプローチし、支援の可能性を認識、理解してもらう。

事業内容は厚生労働省ガイドラインの６つの基本姿勢をおさえ、専門員は地域とゆるやかなつながりを持ち、家庭と地域がつながりやすい状態を作っていく。その為に、保育所・保健師・ファミサポ提供会員・他の親子等と拠点を通し関係が深まる事から、家庭が地域の中に子どもを育てるサポート体制を創るプロセスを支える役割を担っている。

また、世間話の中でつぶやく困り感が、地域の中へ伝わりいろいろな人の意識に残り、それが新たな資源に変わり、地域社会全体で支援できることが大切である。

◇話題提供：浜下峰子さん　氷見市地域子育てセンター　主査（富山県氷見市）

「氷見市の利用者支援事業の取り組み」

平成５年　氷見市地域子育てセンターが富山県モデル事業としてスタート。平成２７年度は出生数が下がり、市を挙げて地方創生に取り組み、子育て支援総合コーディネート事業基本型（利用者支援事業）として新たにスタートした。９時～１６時半の利用時間の中で、昼休みに１時間閉めるのは利用者のニーズによるものである。

こちらは市の中心部の複合施設「いきいき元気館」内にあり、ワンフロア。年間約２万人が利用。父親の育児参加促進事業「氷見らぶり～パパ塾」、ファミサポ情報、地域住民による子育て支援事業のチラシ、拠点事業紹介ファイル、利用者同士の情報記入ノートが設置されている。

（具体的な事例紹介あり）

ネットワーク会議やスタッフ研修を行う中、母子保健型利用者支援事業との調整や子育て世代包括支援センターの開設に向けた検討等を今後の課題としている。

◇グループワーク

１、事例の中で「自分が情報として伝えられるもの」「自分ならこんな事がしたい、出来る」の２種類をまとめ、自己紹介のあとカテゴリーごと一言つけ貼る。

２、７グループがアイデアを出し合う。

◇まとめ：橋本真紀さん

以前なら、自分から伝えられるものと言えば、一時保育のみであったが、今回はハローワーク、ファミリー・サポート・センター事業、産前産後ケアセンター等支援方法の幅が広がり嬉しい。

厚生労働省ガイドラインの６つの基本姿勢をまとめておきたい。

１）利用者主体の支援とは、支援者として、親を「あるべき姿」に導くのでなく、地域の中でどんな関係が有ればその親子が生活への課題に取り組んで行けるか考えること。

２）個別ニーズに合わせた支援とは、困り感の背後にある状況を複合的に捉えること。私達側から支援を考えることも大事だがその家庭の困り感や地域をどう捉えて見ているかも大事。

３）包括的支援とは、困り感全てを視野に入れ捉え支援すること。また、各々の専門機関と連携して支援していき家庭も一緒に取り組んで行く。

４）基本姿勢は子どもの発達を見通した継続的支援である。訪れるかもしれない課題の壁に向き合えるような体制を整える支援。

５）地域ぐるみの支援とは地域の人達が「その子」「家庭」なりに目を向けてかかわっていけるように支援していくこと。

６）これが予防支援となっていく。

■第３分科会　子どもの豊かな育ちを支えるひろばの環境づくり

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】山田智子さん　　NPO 法人子育て応援かざぐるま　代表理事（北海道札幌市）

【講　　師】金山美和子さん　長野県短期大学　講師

【話題提供】友松真琴さん　　上田市中央子育て支援センター　主査（長野県上田市）

子ども自身が“快”と感じる場でその個性を受容されながら、地域の様々な人と関わりを持ちつつ、自発的な遊びを繰り広げることのできるひろばの環境づくりについて考えた。友松さん、山田さんの事例報告や金山先生のミニ講義の後、各グループでそれぞれの拠点で行っている「子どもの豊かな育ちを育む環境づくりの工夫」をたくさん書き出し、共通する重要なポイントを皆で再確認した。

◇話題提供：友松真琴さん　上田市中央子育て支援センター　主査（長野県上田市）

中央子育て支援センター「にじいろひろば」は平成 22 年にできた上田市の中心地域複合施設「ひとまちげんき健康プラザうえだ」の中にある。「みんなが居心地の良いひろばにしたい」「利用者さんと一緒に作っていきたい」「手作りおもちゃを大切にしたい」の三点を大切にし、親子をありのまま受入れ、安心して過ごせる場を目指している。にじいろひろばを立ち上げるにあたり、当時の担当者が他のいろいろな施設を見学し、一から作り上げてきたものを引き継ぎながら、ひろばで日々の親子の様子を見つつ、動線を大切にし、親子が過ごしやすいよう工夫している。日々の小さな事は当日のうちに、大きな事は月２回程のスタッフミーティングで話し合っている。

これからも子どもの育ちを支えられるひろばであり続けるために、見直しをすべき課題、考えていくべき課題がある。利用者と共に親子にとって“快”と感じる場所であるためにスタッフ同士のアイコンタクト、連携を大切にし、利用者の声を聞き、利用者と共によりよいひろばづくりに取り組んでいく。

◇コーディネーター・話題提供：

山田智子さん　NPO 法人子育て応援かざぐるま　代表理事（北海道札幌市）

札幌大谷大学子育て支援センター「んぐまーま」と子育て拠点てんてんの２つのひろばで大切にしている“ひろばのこころ”は、「友だちをみつけよう」「みんなで大きくなろう」。子どもは一緒に育ちあう友だちを、親は地域で一緒に子育てする仲間をみつけ、子どもの育ちを真ん中に据えながら、親も、スタッフも、学生も、大学も、地域も、皆で一緒に育ちあうことをひろばの理念としている。

子どもも大人もひとり一人が主体的に過ごすことを大切に捉え、食う・寝る・遊ぶは各自のリズムで取れるように配慮している。子どもがやりたいことができる環境づくりと大人も居心地がよい場づくりを心掛け、子どもが本棚から絵本を全て出そうとした時も「終わったら片付けてね」と見守っている。子どもには本物を与えたく、キャラクターものは取り込まずに絵画や季節の草花を飾り、乳幼児の発達を考慮し子どもが主体的に遊びこめるおもちゃと絵本を、子どもが取り出しやすく、片付けやすいように用意している。

札幌は全国から転勤族が集まり、雪に初めてふれる親子が多いので、10 月から帽子、スノーウエア、手袋、スノーカバー、長靴を詳細説明付きでひろばの壁面に掲示し、購入の参考にしてもらっている。

ひろばは皆の子どもを皆で見守ろうという雰囲気があり、誰が誰の子どもかがわからないほど皆が入り混じって過ごしている。子どもの物の取り合いはお互いの育ちあいの機会と捉え、それぞれの気持ちを伝えながら見守るようにするなど、「みんなで大きくなろう」を日々実践しようと努めている。

◇ミニ講座　金山美和子さん　長野県短期大学　講師

なぜ、環境づくりが必要か？

ひろばが、子どもが自発的に遊び、他者との関わりを広げる環境となっているか検討することが必要である。実施要綱では環境に関する細かい規定がない分、柔軟に多様な試みができる。拠点の数を増やしていく時代から、中身が問われる時代になり、じっくり遊べる場があるか、また親子が嬉しい、楽しいと思える場であるかといった視点からの環境づくりが求められている。ひろばは子どもにとってははじめて出会う地域社会。すべての親子が歓迎される場所である。

誰もが受け入れられる場としての拠点の環境づくりを考え、親も子も他の人との関わりを持つ中で育つよう支えることが大事である。子どもが楽しそうに遊ぶ姿は親の喜びでもあり、拠点の継続的な利用につながる。環境づくりの視点から、様々な人との関わりを促すために、どの場所、どの場面で関わりが見られるかを再確認することも大切である。コーナーの配置や衝立などを工夫することによりひろばの環境は変化する。

◇グループワーク

７つのグループに分かれ、各自取り組んでいる事、これからこのようにしたい事など意見を出し合う。

各意見を形容詞をつけた見出しに分ける。

◇まとめ

友松真琴さん

自分たちのひろば以外のひろばを知ることができ、その思いや工夫を知ることができ、とても暖かい気持ちになった。私たちのひろばは市の施設のためスタッフの異動があるが、大切なことを次の担当者に伝え、親子にとって居心地の良いひろばであり続けることが大切。

金山美和子さん

親子をどのように支えるかという直接的支援の実践を積み重ねてきた中で、間接的な支援である「ひろばの環境づくり」の重要性が考えられるようになってきている。環境づくりには予算を伴う場合も多いため、すぐに取り組める事と長期の取り組みが必要な事に分け計画的に進めることが大切である。

山田智子さん

グループワークで「見出しに形容詞をつけてください」とお願いした時、など教科書や要綱に出てくる言葉ではなく、「関わりがふくらむ遊具」など豊かな言葉がたくさん出てきた。自分たちが常に大事にしている言葉が見えてきた。ぜひ、たくさんのひろばを見て地域のニーズに合わせたひろばづくりをしていこう。

■第４分科会　様々な課題を抱える子育てへの支援

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】坂本純子さん　NPO 法人新座子育てネットワーク　代表理事（埼玉県新座市）
【講　　師】鈴木晶子さん　一般社団法人インクルージョンネットかながわ　理事（神奈川県横浜市）
【話題提供】河原廣子さん　NPO 法人かもママ　理事長（石川県加賀市）

◇話題提供：河原廣子さん　NPO 法人かもママ　理事長（石川県加賀市）

石川県加賀市はこの１０年余りで子どもの数が２００人程減少している。また、ひとり親や生活保護を受ける人も多い。そして、転出する若者も多く、少子高齢化が顕著に出ている。

「かが保育サポータークラブかもママ」は２００２年に、保育サポーター講座の受講生１２名が“お母さんに、ほんのちょっとのお手伝いができたら”という思いで設立した。その中の母親達から出た「加賀市はお母さん達が出会う場がない」との声を行政に届け、市から運営を受託し、休園中の保育園舎で“ママたちの居場所”「親子つどいの広場まんま」を開設。同時にファミリー・サポート・センターを行う。また、市街地にも出張してひろばを週２回開催し、多様なニーズに対応した活動を行い、幅広いお母さんたちの居場所となっている。

また、リサイクル品の有効活用を行うことで、多くの貧困・ひとり親家庭の支援につなげ、この活動を通して地域と連帯し、かもママ版のネウボラを行う。それと共に、昨年度から産後ケアの事業を委託されるなど、産前産後のサポートを母親だけでなく祖父母も含めた家族全体に対して行っている。アウェイ育児で不安な母親向けにジョブサロンも開催中。

ひろばに来る母親の中には様々な課題を抱えた子育て家庭があり、地域や関係機関との連携をとりながら支援を行っている。そのような家庭を支えるひろばのスタッフは、細やかではあるが出すぎない様、一人ひとりに応じ、ありのままを受けとめて寄り添うように心がけている。

◇質疑応答

Ｑ　拠点と関係機関との信頼関係づくりは、どのように進んでいったか？

Ａ　保健師が双子の家庭を訪問する際にスタッフが同行させてもらうことがあり、その時のスタッフの姿や母親とのかかわり方を見て、「ここなら信用しても大丈夫」と感じていただくことができ、関係が深まった。細かな地域での活動が連携を深めていった。

Ｑ　広場まんまは中山間地にあり、ぷくぷく広場まんまは市街地で行われているが、これはアウトリーチの活動なのか？それとも、広場のみの活動なのか？

Ａ　中山間地の広場だけではなく、アクセスの良い市街地で行うことで、幅広いニーズに対応している。

Ｑ　リサイクル品の活用はいつから行っているか？

Ａ　広場を始めたころから行っている。活動が広がる中で、行政から広場にお母さんたちが行けば安心と感じてもらえるようになり、早い時期から課題を抱える家庭を紹介してもらえるようになった。

◇ワールドカフェ

障がい、虐待、生活困窮、ひとり親、外国籍の５つのテーマで各２グループずつの計１０グループに別れ、テーブルホストがサポートしながら意見交換や議論を積み上げていった。時間を区切り入れ替わりながら、これを３セッション行った。

・虐待

ひろばでは虐待の種を見つけることがある。虐待というと被害者である子どもの立場に寄りがちになるが、ひろばのスタッフとしては加害者である母親のこれまでの姿に寄り添い、母の立場を肯定しながら虐待という問題にどう向き合えるか話し合った。ひろばは表に出すぎず、関係機関と連携をとりながらママの居場所であり続けることがキーワードになるのではないか。

・生活困窮

“「子ども食堂」=貧困”というイメージがある。だから誰でも来て良いといっても利用する人が少ない。食事を提供するだけにとらわれず、食事をすることの本来の目的（文化・学び・コミュニケーションの場等）を考えたネーミングや活動をする必要がある。加えて地域のネットワークも大切である。

・障がい

専門的な機関との連携、役割分担が重要である。ひろばとしては利用者が課題と向き合った時、専門機関とどうつながっているか把握すると共に、母親と日々のかかわりの中で母親と信頼関係を築き、障がいについて言い出せ合えるような関係や場をつくることが大切である。そして、日常の子どもの姿をよく知っていることがスタッフの強みである。我が子に障がいがあると周りにも気を遣うようになるので、それをできるだけ避けてあげる工夫が必要である。

・ひとり親

ひとり親の子どもにとって、子育て拠点や児童センターなどの無料の場は大事な遊び場である。シングル（離婚）はひとつの選択として選んでいる。スタッフは「ひとり親＝かわいそう」というイメージを転換し、“ひとり親”を子育ての多様性の１つとして捉える方が良いのではないか。

拠点のチラシのイラストには両親揃って楽しそうなイラストが多いが、今の子育てからすると、父母別々のイラストがあってもよいのではないか。

・外国籍

「言葉の壁」「孤立した育児になりがち」「育児不足」の３つが課題としてある。課題を解決するために、外国籍の方を巻き込んだり、中心に置くようなイベントを行うことで周りとつながりを持てるようにしたり、食事など皆が楽しく共通の時間を持てるようにすることも良いのではないか。また、その人に合わせるだけでなく、日本に馴染んでもらえるようにする工夫も必要である。

◇講師：鈴木晶子さん　一般社団法人インクルージョンネットかながわ　理事（神奈川県横浜市）

気になる利用者がいた時に、会話から“この人には相談できる人がいるのか”確認できると良い。中にはサポーターとの関係が上手く築けていないケースがある。当事者が地域や専門家に支えられていれば、ひろばは利用者が安心していられる居場所をつくることが大切になってくるが、上手く支えられていない場合にはひろばとして少しだけサポーターとの関係をコーディネートができることが望ましい。これはひろばが独自に行うのでなく、子育て支援コーディネーターや保健師と一緒に行っていく必要がある。そして、専門機関のみでなく、当事者同士をつないだり、居場所があることも大切である。その時、居場所を支える人達にもネットワークが必要になる。当事者にかかわることの全体が見え、何をする必要があるのか分かっていると、そこにかかわる人達がサポートしやすい。専門家は居場所にはなれない。だから、居場所と専門家がつながることがより良い支援につながっていく。

コーディネートは、大きく分けて「現在あるリソースとの関係の改善・強化」「新たに必要なリソースとつなげる」「必要なリソースは地域の中でつながりを持ってつくっていく」の３種類がある。課題を抱える人を専門家・広場など色々な人がかかわって連携をとり、支えていくことが大切である。

◇コーディネーター：坂本純子さん　NPO 法人新座子育てネットワーク　代表理事（埼玉県新座市）

拠点事業の重要性が社会的にも大きく認識されてきた一方、子育ての孤立化や課題を抱えた人が見えなくなっている現状がある。その中で、子育ての最初のところで戸惑いながらも力を貸してほしいとひろばを訪れるお母さんとは良い接点ができていると思う。そして、かかわるひろばの役割は益々重要であると感じる。ただ場を開くだけでなく、姿を見守り何ができるか考え、寄り添いながら一緒に歩むことがひろばに求められている。

周りの人達の力で子どもは成長していける社会になっているが、それが上手くつながらず、不幸になってしまうこともある。だから、周りの人達をつなぐことがとても大切になる。

ひろばとは色々な人が集り、休む中でつながり、元気になって飛び立っていく『とまり木』のような活動ではないだろうか。まだ見えていない課題を抱える家庭の力になるヒントや情報として、今回学んだことを活かしていってほしい。

■第５分科会　地域をホームに変える地域子育て支援拠点のちから

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】岡本聡子さん　　NPO 法人ふらっとスペース金剛　代表理事（大阪府富田林市）
【講　　師】松田茂樹さん　　中京大学現代社会学部　教授
【話題提供】松下妙子さん　　NPO 法人ふじみ子育てネットワーク　代表（長野県諏訪郡富士見町）
　　中井香保里さん　松本市こども部こども育成課（長野県松本市）

◇コーディネーター：岡本聡子さん　NPO 法人ふらっとスペース金剛　代表理事（大阪府富田林市）

ひろば全協では昨年度、私たちが親子のために何ができていたか、どんな役割を果たしてきたかを把握するためのアンケートを実施。2,400 人のうち 1,175 人の回答を得た。その中で、「あなたが生まれ育った市町村で子育てしていますか？」の問いに 72%の母親が「いいえ」と答えた。そこからみえてきたものは、友達がいない、話し相手がいないなどの母親の疎外感、自分が生まれた町でないアウェイ感であった。利用者アンケートからみえてきたもを、私たちはどう捉え、拠点が親子にどうかかわることで、地域がホームになっていくのかを探る時間にしたい。

◇話題提供：松下妙子さん　NPO 法人ふじみ子育てネットワーク　代表（長野県諏訪郡富士見町）

約 20 年前長野へ夫とともにＩターン。富士見で出産、自身も初めはアウェイ育児だった。ふじみ子育てネットワークの立ち上げに関わったことで仲間ができ、今では富士見町は自分にとってホームタウンとなっている。

富士見町地域子育て支援拠点「子育てひろばＡｉＡｉ」は開設から 11 年、人口 15,000 人程の小さな町の小さなひろばである。ひろばで大切にしていることは、①傾聴　②直接的なコミュニケーション　③第 2 の実家をめざす　④子どもの育つ権利を保障する、である。

ＡｉＡｉの利用者へのアンケートでも、ひろば全協のアンケート結果同様、7 割が町外出身者であった。また、日常的に子育てを担っているのは 8 割が母親であった。

アウェイ育児をしている親が、富士見町の中で、より多くのつながりをつくることができるよう、様々な切り口で活動をしている。親子自然体験「おさんぽ隊」・親のための各種「講座」・利用者が悩みを共有する「カフェ」・親のエンパワメントをめざした自主活動支援などが主なものである。それらに加えて、新しい取り組みとして、「ＡｉＡｉスタンプカード」「はじめてさんツアー」「野外出張ひろば（青空ＡｉＡｉ）」「スープの日」などで敷居の低い、利用しやすいひろばを目指している。これらの活動を通して、親子がひろばでつながりをつくり、地域がアウェイからホームへと変わっていくことを願っている。

自分や自分の子どもを利用者という大きな括りではなく「個」として受け入れ、認めてくれるひろばが、親子が地域に根ざす入口になる。個々の親子を受け入れるには支援者の意識（受容）がたいせつである。

◇話題提供：中井香保里さん　松本市こども部こども育成課（長野県松本市）

長野県のほぼ真ん中に位置する松本市。アルプスを望む城下町。年間出生数約 2,000 人。

市内に直営の子どもプラザ４か所、指定管理制度つどいのひろば 21 か所の支援施設がある。子育てしやすい環境を充実させることで、人口の自然増を目指す。そのために子育て支援拠点施設のはたす役割は、子育て関係情報の提供、育児相談・助言、子育てサークルや子育てボランティアの育成や支援、育児に関する講座の実施などである。拠点の職員の心得としては、まず最初に笑顔で迎え入れること。次に、利用者の変化を察知し、柔軟に対応できることが挙げられる。そのことが育児不安の緩和、虐待等の早期発見・予防につながっていくと考える。

市でおこなった出産育児に関する調査で、育児ができるかどうかわからない、不安であると答えた母親が３割弱もいた。松本市の本年度の取組みとして妊娠から出産・子育てまでの切れ目ない支援の一つとしてこどもプラザの１館に子育てコンシェルジュを配置し、利用者支援事業の取り組みを始めた。今後もどんなニーズがあり、拠点として何ができるのかを模索しながら、市の子育て支援策の充実を図りたい。

◇講師：松田茂樹さん　中京大学現代社会学部　教授

出生率を回復させる子育て支援のあり方を考えるため、三つの視点を提示したい。

まずは、少子化の要因とそれに対する対策について。

我が国の合計特殊出生率が回復していないのはなぜか。要因は、未婚と結婚しても経済的理由から理想の子どもの数が持てないことなどが調査から明らかである。これまでの少子化対策は、継続就業する正規雇用者同士の共働き夫婦をターゲットとした仕事と子育ての両立支援が中心であった。子育て家庭の多くを占める夫就業妻家事育児の家庭の支援は十分なされてこなかった。また、未婚化の加速への対策も十分ではなかった。今後の少子化の対策として、ターゲットを広げる視点が必要である。

次に、育児を支えるネットワークの必要性である。

乳児を抱える母親や、地域のコミュニティ力が弱いエリア（特に郊外）、また居住年数の短い家庭は［孤育て］になっていることがある（＝アウェイ育児）。調査により、子育てひろばの利用などで育児ネットワークが多い人ほど育児不安が少なく出産意欲が湧くことがわかった。

最後に、自治体の少子化対策に焦点をあてる。

地域ごとに少子化の状況も異なる。例えば職業の面では、製造業などのある地域は出生率が高く、逆に失業率の高い地域、また非正規雇用の多い地域は出生率が低くなっている。その他、祖父母がいる家庭が多い地域は出生率が高い傾向がある。各自治体がその地域の実情に応じて取り組んできた幅広い少子化対策メニューは、出生率の回復に寄与している。支援のメニューの幅が広いと出生率も回復している。さまざまな子育て世代に様々な方面からのバランスのとれた政策の充実が必要だと思う。

アウェイ育児になりがちな３つのポイント①在宅子育て②育児休暇を利用しながらの在宅子育て③地方自治体が若い世代を地域創生として取り込んだ後のその地域での子育て。さらに、ひろばにきているから大丈夫ではなくて親子で来ているが、他の親子と全く交わらない方。支援者とのつながりだけの方。この方たちの横のつながりができることが必要である。つながっていくことで、アウェイがホームに変わってゆくのではないか。

◇コーディネーター：岡本聡子さん

アウェイをホームに変えていくには直接的な手助けが必要であることが見えてきた。その具体的なものとしてアウェイを感じている人には仲間不足、情報不足、安心不足などいろいろな要因が混ざり合っている。支援する側もひろばの中で多彩なメニューを持ち、支援者の意識も多彩な視野を持ち、地域のサポートも幅広い分野からサポートをし、アウェイを感じている親子がどこかにいるのではないかということを感じて支援をしていくことが必要である。

お母さんたちの笑顔は安心からくるものである。その安心を作る場として拠点がある。ここにいていいんだという気持ちがアウェイをホームに変える大きな力になっていくと考える。

■第６分科会　子育てを産前産後から切れ目なく支えあえる地域に！
地域子育て支援拠点の可能性を語ろう

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】松田妙子さん　NPO 法人せたがや子育てネット　代表理事（東京都世田谷区）
【助　　言】立花良之さん　国立成育医療センター乳幼児メンタルヘルス診療科　医長
【話題提供】村田恵子さん　長野市こども未来部保育・幼稚園課　課長補佐（長野県長野市）
平澤　泉さん　長野市もんぜんぷら座こども広場じゃん･けん･ぽん　主任(長野県長野市)

◇話題提供：村田恵子さん　長野市こども未来部保育・幼稚園課　課長補佐（長野県長野市）

長野市では、0 歳から 18 歳までの子どもに関する情報誌「子育てガイドブック」を作成している。その他、子育て情報や胎児の発達の様子などを知らせるメールサービスも行っており、母親が携帯電話から気兼ねなく情報を得られるようにしている。産後は、お母さんにとっての参考書となる「赤ちゃんのしおり」を交付し、保健師や助産師が相談にのる産後ケア事業や、乳幼児健診を行い、安心して子育てできるようにしている。また、子どもが成長するにつれ、不安や悩みも変化するため、こども広場や子育て支援センター、ファミリー・サポート・センターなども開設し、遊び場や交流のきっかけを生むサービスを行っている。年中児をもつ母親へのアンケート結果から、自分に余裕がないと子育てを楽しめないことが多いことが分かっている。様々なサポートをしていく中で、母親がこれからも楽しんで子育てできるように支援していきたい。

◇話題提供：平澤　泉さん　長野市もんぜんぷら座こども広場じゃん･けん･ぽん　主任（長野県長野市）

じゃん・けん・ぽんでは、地域の子育て家庭にとって役立つ、施設・事業利用の実現を意識している。特に、スタッフが施設利用者及びアウトリーチ支援でキャッチした声を反映して、事業を行うことを大切にしている。現代の子育ては、少子化や孤立化、近所付き合いの希薄化、共働きによる子育ての負担増加、ニーズの多様化（障がい、虐待、貧困）など様々な課題があるが、支援の選択は当事者がすることを念頭に置きながら、必要な支援を必要な人に届ける。また、当事者を中心に地域や専門家、行政と連携しており、学生や地域住民によるボランティア活動も盛んである。その他、学生と赤ちゃん（保護者）のふれあい交流、妊婦と家族のためのプレネイタルミーティング、夫婦でのマタニティセミナー、家庭訪問型子育て支援事業ホームスタート、生後２ヶ月から参加できるねんねの会、おしゃべり会など、妊娠期（妊娠前）から出産後（子育て期）の継続した支援を心掛けている。今後、利用者支援事業を行いたい。

◇コーディネーター：松田妙子さん　NPO 法人せたがや子育てネット　代表理事（東京都世田谷区）

世田谷区の母子保健機関では、妊娠中・産後などにメンタルヘルス不調の母親に早く対応し、親子をサポートする「母と子のサポートネットせたがや」を行っている。現状ではなかなかうまくいっていない母子保健機関の連携をスムーズにすることが目的である。年間出生数が 8,000 人と多いことから区を５つのグループ(支所)に分け、妊娠期面接を行っている。また、同区では母子手帳と一緒に１万円分のチケットを発行し、母親はチケットを使ってひろばに行ったり、母乳サポートしてもらったりすることができる。児童館では参加費無料の産前・産後のセルフケア講座を行っている。ストレッチで体をほぐすのはもちろんのこ

と、産後の母親にとっては赤ちゃんと外出するきっかけ作りになり、妊婦にとっては赤ちゃんを抱っこするお母さんを見たり、赤ちゃんの泣き声を聞いたりすることで、育児のイメージ作りができる。コミュニケーションをとりながら、子育てに役立つ地域情報を得られる場にもなっている。

◇助言：立花良之さん　国立成育医療センター乳幼児メンタルヘルス診療科　医長

日々の活動の中で「気になるお母さん」をどう支えていくか。産前産後にうつ病などのメンタルヘルス不調になる母親は初産で４人に１人、経産婦で10 人に 1 人。これは医学的に見ても、非常に多く、母親には精神的なサポートが必要である。保健師や、産婦人科、子育てひろばなど、地域の関係者のネットワークは不可欠で、虐待やうつ病を防ぐ重要な土台となる。大人になったとき幸せな人とそうでない人の育った環境を調べると、幸せな人は「健康な家族」「社会に開かれた家族」を持っている。地域の人々と交流することが、子どもを育てるのである。私たちは、早い時期から地域とのつながりを支援していくことが重要である。子育てひろばは、「健康な家族」「社会に開かれた家族」を作るのを支えていくと思う。

◇グループワーク

①自己紹介

②切れ目ない支援とはどういうことか。具体的に何ができるか。アイディアを出し合い、書き出す。

③お互いに見合って、いいね！シールを貼る。〈アイディアの一例〉

・両親学級の会場の拠点にする。
・母子手帳を渡す時に広場のパンフレットを渡す。
・母親学級や健診に広場スタッフも訪問
・妊娠中の食事にについて講座を開く。
・マタニティーウェアのリユース事業を行う。
・ひろばデビューデーを開催(月１回)
・ママの文化祭
・妊娠から生後４か月までのヘルパー制度
・産院で、産後の支援を紹介する。

◇まとめ

村田恵子さん　人を起点として、人とのつながりが増えるので、お母さんたちの力になれるようにこれからも前向きに、元気に頑張っていただきたい。

平澤　泉さん　多様な人たちが集まって様々な意見が出たと思う。保護者の力を育てるのも、ひろばの仕事。自分たちも親と一緒に育ち合いたい。

立花良之さん　みなさんコミュニケーション力豊かで驚いた。そのコミュニケーション力があれば、お母さんたちや地域ともつながっていける。これからも期待している。

松田妙子さん　パートナーとなれるところは行政だけでなく、町の中に沢山ある。地域の人たちが幸せになれるために、仲間や利用できる場所を増やすことで産前産後のお母さんたちにも届くと思う。いつでも来て良い場所だが、具体的な入口作り、きっかけ作りも大事だと感じた。生まれてきて初めて来る場所ではなく、「生まれました！」と赤ちゃんを連れて来てくれるような拠点にしたい。

■全体会　２日目

【ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ】 奥山千鶴子　　ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会　理事長（神奈川県横浜市）
【第１分科会】松村由美子さん　ＮＰＯ法人おしゃべりサラダ　代表理事（長野県飯田市）
【第２分科会】浜下峰子さん　　氷見市地域子育てセンター　主査（富山県氷見市）
【第３分科会】山田智子さん　　ＮＰＯ法人子育て応援かざぐるま　代表理事（北海道札幌市）
【第４分科会】坂本純子さん　　ＮＰＯ法人新座子育てネットワーク　代表理事（埼玉県新座市）
【第５分科会】松下妙子さん　　ＮＰＯ法人ふじみ子育てネットワーク　代表（長野県諏訪郡富士見町）
【第６分科会】松田妙子さん　　ＮＰＯ法人せたがや子育てネット　代表理事（東京都世田谷区）

登壇者が①分科会での要旨　②これからの課題について画用紙にキーワードを記入。その後、各々２分間で発表した。

◇第１分科会　地域子育て支援拠点の４事業キホンのキ

松村由美子さん　ＮＰＯ法人おしゃべりサラダ　代表理事（長野県飯田市）

①　環境作り　場面＆スタッフ

物的、人的、スタッフとしてのかかわりも含め、どんな環境作りをしていくか。運動欲求の強い子ども、静かな環境を求める親子、赤ちゃん、それぞれが満足して帰るにはどのようにすればいいのかを考えた。時間帯やスペースで区切ったり、プログラムを作るなどの工夫が大事である。

②　地域をまきこむ

子育て講習会は行ってはいるが、親向けのもので内側に向けたものが多かった。子育て支援に関する講習会では、ママたちの支援を地域みんなでサポートできるように、また家庭や子育ての理解者を増やすためにも地域をまきこむための講習会をやっていこうと思う。

◇第２分科会　　利用者支援事業の基本をおさえる

浜下峰子さん　　氷見市地域子育てセンター　主査（富山県氷見市）

①子育て支援拠点事業と利用者支援事業

具体的にできることなど、情報提供がたくさんできた。これはたくさんの研修を行った成果である。この２つの事業を取り組むことで困難な家庭や外国人などの家庭の情報を得ることができ、事業の兼ね合いの中で支援することができる。

②研修することがとても大切です！！

現在、利用者支援事業の実践者が勉強したいタイミングにある。すり合わせやすみ分けは研修しないとできないことなので、研修がとても大事である。

◇第３分科会　子どもの豊かな育ちを支えるひろばの環境づくり

山田智子さん　ＮＰＯ法人子育て応援かざぐるま　代表理事（北海道札幌市）

①ひろばの環境をふり返り、さらにかかわりがふくらむひろばへ

上田市は研修に力を入れており、理念の理解が環境作りに反映されている。子どもの動きの動線やひろばの活動により、おもちゃを減らすなどして環境を変えている。

②直接的な支援（かかわり）から間接的な支援（環境作り）へ

支援者が一歩ひいて場をみることで、たくさんのつながりが生まれる！今までの研修は直接的なかかわりのものが多く、意識がそちらにいきがちだったが、今後は環境作り等間接的な支援に意味があると思う。場を作ることで、つながりを持つことができ、環境を通して親子に伝えられることもある。

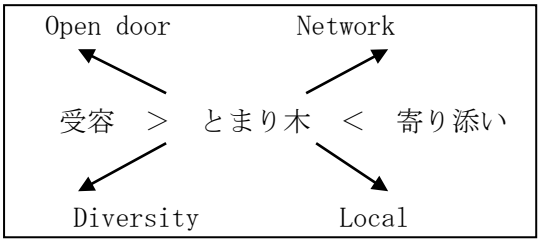
◇第４分科会　　様々な課題を抱える子育てへの支援

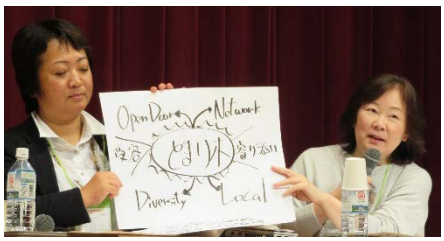
坂本純子さん　　ＮＰＯ法人新座子育てネットワーク　代表理事（埼玉県新座市）

①耳をかたむけ、寄り添う人のいるとまり木

社会が変化し、それに伴い家族も変化してきている。石川県加賀市の 10 年間の取り組みをみると、地域の中での信頼関係ができあがり、総合的に取り組む力がついたことが分かる。横浜の生活困窮者の例では、様々なサービスにうまくつながっていかないことを紹介した。ひろばは出会いの場でもあるが、専門家だけでは居場所は作れない。

②





ひろばの基本ができていて、それから広げていく支援。今現在まったなしで課題が押し寄せている現状である。ひろばの職員が社会の動向に関心を持ち、専門家へつなげていくネットワークが必要である。またそのネットワークのメンテナンスも必要である。多様な課題を持つ親子が多い中、すべてを対応することはできないが、寄り添い、共感することはできる。私たちは地域に根ざし、私たちも地域を作っている一員である。親子が羽を休められる場所（とまり木）になる。

◇第５分科会　　地域をホームに変える地域子育て支援拠点のちから

松下妙子さん　　ＮＰＯ法人ふじみ子育てネットワーク　代表（長野県諏訪郡富士見町）

①安心　つながりや手助けから

アウェイ育児をしている親が住んでいる場所をホームと思えるようにするには、私は受け入れられていると思える、安心できる場所があることが大事。利用者ひとりひとりを大切にし、それぞれの立場にあったメニューが必要。それには、つながり作りのお手伝いも必要である。少子化に関しては特効薬はなく、幅広く多様な支援が必要である。

②多様なメニュー（意識も）

利用者の立場を理解し合い、いろいろな人が集うひろばであるという意識を持つ。拠点、自治体も様々な多彩なメニューを持っている。自分たちから地域や行政へ発信していく必要がある。

◇第６分科会　子育てを産前産後から切れ目なく支えあえる地域に！

地域子育て支援拠点の可能性を語ろう

松田妙子さん　　ＮＰＯ法人せたがや子育てネット　代表理事（東京都世田谷区）

①地域子育て支援拠点事業は「地縁」より短期間に入りやすい

産後の支援はだいぶつながってきていることを実感した。あやし方講座など具体的な入口を増やし、妊娠期から拠点に繋げていく。

②多様なパートナーとつながろう（当事者も含む）

プレパパ、ママが「生まれた」と来てくれる。地域の子育てをバックアップしてくれる多様な町のパートナーとつながっていく。地域とのネットワークを作り、地域の人々と活動していく。生まれる前から拠点事業の情報発信をしていく。

◇コーディネーター　奥山千鶴子　ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会　理事長（神奈川県横浜市）

全体会は、二日間参加できなかった人にも全体と通した流れをお伝えすること、さらに他の分科会でのディスカッションを共有するために企画した。

親子の交流の場の環境設定、意義を再確認すると共に、今後は「交流の場」を通して、さらに産前からのつながり、一歩踏み込んだ家庭への支援を行う必要性を再確認、次年度の再会を期待して終了となった。